

「馬鹿者を命ず！」

前までのあらすじ
 伊予南市に人を呼び込むという広岡のアイデア実現のため、市長はまちおこし会社を設立し、新庄と広岡に経営させるといふ。一方、麻衣の彼氏だった名女川が駅で待っていると連絡が入り、悠太と迎えに行く。

新庄誠人 (しんじょう・まこと) 39歳、伊予南市役所・地域振興課長。
大渡晴美 (おおわたり・はるみ) 45歳、伊予南市長。大渡薫子の母。
四分地恒三 (しぶち・こうぞう) 59歳、天興大学地域デザイン学部教授で西朱雀プロジェクト社長。
名女川直行 (なめかわ・なおゆき) 27歳、麻衣の会社員時代の先輩で彼氏、麻衣を追いかけて……。
亀田太 (かめだ・ふとし) 29歳、伊予南市役所・地域振興課員。
シヨーン・次川 (つぎかわ) 45歳、アメリカの投資ファンド、ヴァインセント・ファンド副社長。

登場人物
石打悠太 (いしうち・ゆうた) 25歳、主人公、商店街の再生やまちおこしプロジェクトを手がけるベンチャー企業、西朱雀プロジェクトの社員。入社2年目で四国・伊予南市に赴任する。
喜多嶋翔 (きたじま・しょう) 25歳、西朱雀プロジェクト社員。悠太の1年先輩。
青山麻衣 (あおやま・まい) 24歳、悠太の元カノ。悠太をふっておきながら再び伊予南市にやってきて、悠太の仕事を手伝い始める。
広岡卓次 (ひろおか・たくじ) 49歳、地域おこし協力隊員として東京から伊予南市に移住したが……。

今 晩の飛行機で東京に来てくれないか？ 予期せざる事態が起きてね。君の力が必要なんだよ

四分地は無言を言わせない口調だった。予期せざる事態……あの、どのような事態ですか？

「それは直接説明するよ」
 「でも僕、アパートを引き払ってしまっただけだ」

「会社のベッドを使っているぞ」
 電話を切った悠太は腕時計を見た。時刻は午後二時前、夜の便なら余裕で間に合いそうだった。

「悠太も一緒に来て」
 麻衣の声で目の前の現実を引き戻された。「あたし、名女川さんとはもう一対一で会いたくないの」

悠太は不承不承うなずき、車を下りて麻衣と一緒に名女川という名の彼氏のもとに向かった。
 「麻衣！」

名女川は麻衣に気づいて満面の笑みを浮かべた。笑うと丸い顔に幼さが増し、二十七歳のように見えなくもない。

麻衣は険しい顔で名女川の前に立った。「何しに来たの？」

「何しに……、決まっているじゃないか。麻衣に会いに来たんだよ。探したんだぞ」
 名女川は真顔になった。

「麻衣、一緒に東京に戻ろう」
 「あたし帰らないわよ。こっちで仕事を見つけたから。こちら、あたしの元カレで西朱雀プロジェクトの石打さん、あたし石打さんの仕事を手伝っているの」

「あ、どうも」
 名女川は悠太に律儀にお辞儀し、「麻衣、そんなことを言わないでくれよ」と厚い唇を尖らせて甘えた声を出した。
 「名女川さん、麻衣と呼ぶのはやめてくれない？ あたしはもうあなたの彼女じゃないんだから」

「麻衣……」

「ほらまた呼んだ！」
 「だって僕はまだ君を彼女だと思っているから。別れたつもりはないから」

「あたし、不倫とかそういうの嫌いな」「不倫じゃないよ。だって僕は独身だから」「同棲している彼女がいるんだから、不倫と一緒によ！」

麻衣は名女川を一喝し、一歩後ずさった。「そういうわけなので、あたし、もう行くわ」

「ちょっと待っててくれよ。俺はどうすればいいんだよ」

「東京に帰ったらいいじゃない。飛行機はまだあるでしょう？」

「そんな……せめて一日だけでもここにいてさしてくれよ。会社だって休みを取って来たんだ」

麻衣は今にも泣き出しそうな名女川を冷めた目つきで見ているが、ふと何かを思いついた顔になった。

「そんなにここにいたいのならあたしの仕事、手伝ってくれる？」

「麻衣……じゃなくて君の仕事を？」
 「ホームページの制作、いくつか教えてほしいことがあるのよ。嫌なら東京に帰って」「嫌なわけじゃないか。もちろんやるよ」



名女川は笑顔になった。
 悠太たちが事務所兼社宅に戻ると、喜多嶋がすでに帰宅していた。待ちかねたように悠太たちを出迎えた喜多嶋は「手に入っただぞ」と得意げな顔をして声を張った。

悠太はきょとんとした。「マイクロボスの話だよ。いづれ必要になるからとお前が言ったんじゃないか。誰この人？」

「あ、私、青山麻衣の先輩で彼氏です。麻衣がお世話になっております」
 「彼氏じゃない！ 名女川さん、いい加減にしてよ！」

喜多嶋はわけが分からないとばかりに首を振り、リュックに荷物を詰め始めた悠太に「いぶかし気に見た」
 「お前、どこかへ出かけるのか？」
 「四分地社長から至急東京に来いと言われて」

たんです」

「もしかして出戻りの異動か？」

「用件があると言われました。たぶんすぐここに帰ってくると思います」

「ちょっと待ってよ。ということはあたし一人でこの無駄にデカいのと名女川さんの相手をしなければいけないの？」

「だからすぐに帰ってくるから」

悠太はリュックに荷物を詰める手を休めずぶつさらばうに言った。麻衣と名女川のやりとりを見ているのが辛くて早くここから出ていきたかったのだ。麻衣は「別れた」と言い、名女川は「別れたつもりはない」と言う。悠太は混乱して、どんな顔をして二人に接していいのか分からなくなっていた。

リュックに荷物を詰め終えた悠太は立ち上がった。

「もう行くの？」

「トイレ」

「ねえ、さつきからなにぶりぶりしているのよ。もしかしてあたしが名女川さんに仕事を頼んだこと怒っているの？ それって妬んでいるってこと？」

「そんなんじゃないよ」

悠太は麻衣から逃げるように部屋を出た。

心ならずも新庄に車で送ってもらい、山

色彩は、今でも目に焼きついている。秋から冬にかけての星空はいつまでも見続けていたくなるほど神々しく、美しかった。

広岡は便せんに目を落とした。

さほど長くはない手紙は以下のように結ばれていた。

「それからどうか新庄さんや亀田さんを責めないでください。『どうしても田舎暮らしに馴染めない』そう相談した時、市役所の人たちは確かに『そこまで言うなら、あなたは都会に戻り、時々、伊予南市に来たらどうでしょうか』と別居を勧めてくれました。

でも私はそれで背中を押されたわけではありません。市役所の人たちから『ここにとどまってください』と懇願されたとしても、私は東京で仕事をしたい気持ちを抑えられず、いざれ出ていきました。岐阜の山深い町で生まれ育った私にとって、都会への憧れは一生捨てられるものではないのです。

私は幸せになります。あなたも幸せになってください」

便せんを封筒に戻した広岡は、別れはやはり必然だったのだと思った。

広岡はただ人生を変えたくて、会社での仕打ちから逃れたくて、伊予南市に移り住んだ。鮎美の気持ちを慮ろうなどとは露

の中腹にある廃屋のようなねぐらに帰ってきた広岡は、住み慣れた我が家に戻ってきた安堵の気持ちを覚えた。

伊予南市にやってきて二年余りしか経っていないのに、すっかりここでの暮らしに馴染んでいたなんて、自分でも意外だった。もしかしたらもともと田舎暮らしが性に合っていたのかもしれない。

遠ざかる新庄の車を見送り、半開きの玄関ドアを開けて屋内に入った広岡は、上がり框かまちに郵便物が置いてあるのを見つけた。ごく一般的なサイズの封筒だ。ここを引き払おうとした時には見当たらなかったの、留守にしている間に郵便局員が届けてくれたのだろう。

広岡は封筒を手に取り、裏返して差出人を見た。

三代川鮎美、別れた妻だった。

三代川は妻の旧姓だ。再婚して苗字がまた変わったはずだが、広岡がすぐ分かるように敢えて旧姓を使ったのだろう。

広岡は畳部屋に行き、壁にもたれて封を切った。便せん一枚に書かれた懐かしい文字が目飛び込んでくる。

「広岡卓次様

ご無沙汰しております。まだ五月ですが一日と気温が上がってきていますね」

そんな型通りの時候のあいさつの後、鮎

ほどにも考えなかった。

その思いと行為が鮎美を傷つけ、追い詰めてしまった。

では、あの時、移住しない選択肢はあっただろうか。

なかったと今も思う。あのまま東京に居続けていたら身も心もおかしくなってしまうところまで追いつめられていたのだ。

ふと気づくと、自然に涙が頬を伝っていた。

「俺にできることは今の自分を、今の状況を受け入れることだけなのだ」

そう広岡は思った。

大渡晴美市長から社長就任を命じられた新会社の名前について、広岡とともにアイデア出しを行い、その後、広岡を自宅まで送り届け、さらに生産者の家を何軒か回って、ようやく地域振興課の席に戻ってきた新庄は、コーヒーを飲みながらパソコン画面を起動した。

ヴァインセント・ファンドのショーン次川からメールが届いていた。

新庄はタイトルをクリックし、文面を読んだ。

内容は、新庄たちが昨晚、提案したヴァインセント・ファンドが保有する二名島バッテリーの株買い取りについてだった。

美はこう綴っていた。

「お元気で過ごされていますか。」

実は私が再婚するという手紙をあなたに出した後、あなたがどう受け止めてくれたか気になって、伊予南市役所の亀田さんに連絡を入れてみました。

すると、あなたはとてもショックを受け、伊予南市から出ていくと言っていたと聞かされました。

私がこんなことを言うのは差し出がましいと承知していますが、あなたはどうか伊予南市に残り、まちおこしに力を注いでください。

伊予南市に移り住んでからのあなたは本当に生き生きとしていました。東京にいたころとは別人のように楽しそうに働き、余暇を満喫していました。私にはそれが疎ましく、また妬ましく思えたほどです」

広岡はここにやってきたばかりのころを思い出した。

確かに鮎美が書いている通りだった。田舎暮らしのすべてが、会社でリストラ部屋に追いやられ傷つけられた心を癒やし、解きほぐしてくれた。

まちおこしの仕事は新鮮だったし、時間を見つけては自然の中を散歩するのが楽しくてたまらなかった。初めて山の中腹から伊予南市の海を見下ろした時の鮮やかな青い

一読した新庄はすぐに受話器を取り、市長室に電話を入れた。

一時間後、指定された時刻きっかりに市長室に顔を出した新庄を、晴美はドアの前で待っていた。

「行くわよ」

「え、どこへですか？」

「あの人、のところに決まっているじゃない」

「あの人、って……」

「新庄、あなた昼寝して寝ぼけているの？ 父のところよ。アポを取ったから。ほら、ぼおっとしていないで付いてきなさい」

エレベーターに乗り込んだ晴美はポケットに手をつ突っ込み、新庄が送ったショーン次川からのメールの打ち出しを取り出した。「このメールを読んで、父の魂胆が見えてきたの。さすが一代で二名島バッテリーを築き上げただけのことはあるわ」

「どういうことですか？」

「あなた、このメールを読んでヴァインセント・ファンド側の焦りを感じない？」

「そう言われてみればそうですね。私たちがヴァインセント・ファンドに株買い取りを提案したのは昨晚でした。あれから丸一日も経っていないのに、『最高経営責任者のヴァインセントの了承を得た』と買い取りに応じる返事が副社長から来ました。ちょっと

まちおこし特命社員
石打悠太

馬鹿者を
命ずる

と早すぎるようにも思えますね」
「その通りよ。あたしもまさにそう思ったわ」

エレベーターを降り、市庁舎を出た新庄と晴美は駐車場に停めた公用車に乗り込んだ。

「それだけじゃないわ」

晴美は続けた。

「副社長からのメールによれば、『ヴィンセントは売却価格についても相談に乗れると言っている』とのことなのよ。彼らの狙いは売却する相手が誰であれ、二名島バッテリーであれ我々であれ、高値で買い取ってもらうことでしょうか？ それが彼らのやり口だったわけでしょう？ 『売却価格についても相談に乗れる』だなんてちよっとおかしいと思わない？」

「確かにその通りですね。ヴィンセント・ファンドラしくありません。でも、それと榎社長の思惑とどういう関係があるんですか？」

「それをこれから確かめに行くんじゃない。もし、あたしの推理が当たっていたら、伊予南市から本社工場を移転させるという父の計画を撤回させられるかもしれない」

「本当ですか？」

「あくまでも希望的観測よ。いずれにしても鍵を握っているのはあのまちおこし特命

社員の石打悠太がどこまで頑張ってくれるかだわ」

晴美は脚を組み、遠くを見つめた。

午後五時三十分発のJAL四六二便は平日だというのに搭乗客が予想していた以上に多く、残っていた席数は二つだけだった。間一髪、その一つを確保した悠太は三つ並んだシートの真ん中に体を沈め、ほっと溜め息をついた。

麻衣と喜多嶋、名女川の三人に見送られて空港行きのバスに乗り、東京に向かうなんて何だか不思議な展開だった。三人とも伊予南市にやってくるのを悠太が出迎えたのだ。おまけに後に残った三人がいったいどんな会話をするのか、まったく見当がつかない。

午後六時四十分、悠太を乗せた飛行機は定刻よりも十分早く羽田空港第一ターミナルに到着した。到着ゲートをくぐった悠太はモノレール乗り場へと急ぎ、発車間際の区間快速に飛び乗った。

モノレールが地上に上がり、車窓に広がる東京湾岸の夜景が目飛び込んできた。

悠太は息苦しさを覚えた。目の前の倉庫や工場、遠くにそびえる高層ビルの群れが圧倒的な存在感で迫ってきたのだ。

東京を離れてわずかな期間しか経ってい

ないのにこの違和感は何なのだろう。以前は何でもなかった満員の車内の人いきれさえ今では疎ましく感じられる。

浜松町で山手線に乗り換え、三十分以上かけて西朱雀地蔵通り商店街にある西朱雀プロジェクトの事務所にたどりついた時には身も心もくたくたになっていた。満員電車で揺られ、人混みを縫って歩くのがこれほど心身を消耗させるとは思わなかった。

西朱雀プロジェクトの事務所には社長の四分地だけでなく一年先輩の花咲かえでも残っていた。



二人とも遠路帰京した悠太を「お帰り！」と立ち上がって出迎えてくれると思いきや、四分地は「おう」と声をかけただけ、かえでに至っては仕事に集中してパソコンから顔を上げてくれさえしない。

「ただいま帰りました」

拍子抜けした悠太は長旅の疲れもあり、もとの自分の席に力なく腰掛けた。

「石打が帰って来たことだし、行くか」

四分地が誰にもなく言い、立ち上がった。

「石打、お前、飯は食べてきたか？」

「あ……いえ」
四分地に聞かれて夕食を食べていなかったのに気づいた。それどころか昼食も食べていない。

「腹が減っているところ悪いが、これから小一時間ほど俺につきあってくれ。お前の考えを聞かせてほしいんだよ」

四分地はサマージャケットを羽織った。事務所を出た四分地は西朱雀地蔵通り商店街を天興大学方面へと歩き、商店街の中心ほどにある仕舞屋しまたやの前で立ち止まった。

間口が二間ほどのごくありふれた商店の建物で、すっかり色あせた扁額には何とか読み取れる文字で西朱雀酒店と書かれている。どうやらもとは酒屋だったらしい。ガラ

スサツシの向こうは真っ暗で人の気配はまったくない。

四分地はポケットから出した鍵を錠に差し込みサツシを開けた。商店街の明かりに照らされて屋内の様子がほんのりと浮かび上がる。

四分地は中に入った。悠太もうながされて後に続く。

広さは小学校の教室ほどだろうか。奥行きが思った以上にあり、商品を取り払った棚が左右両側の壁にくくりつけられている。

「どうだ？」

「どうって？」

「ここだよ。立地も広さも申し分ないと思わないか？」

「はあ……」

「実は西朱雀地蔵通り商店会からこの空き店舗の有効活用について相談を受けたんだよ。経緯をかいつまんて話すと、そもそもここで長く酒屋を営んでいた老夫婦が老人ホームに入るようになってね。酒屋を廃業せざるを得なくなっただ。老夫婦は空き店舗の利用を商店会に一任したんだが、

商店会は頭を抱えてしまった。商店街の店と客を取り合う同業の店は入れられないし、商店街の趣きを損なうような店にも入ってほしくない。さりとて住居やアパートにしたら商店街の賑わいに水を差してしまう。

もとより酒屋の経営は極めて厳しいので酒屋を誘致するのも困難だ。そこで俺のところに『どうしたらいいでしょうか』と相談に来たわけだ」

「四分地社長がおっしゃっていた予期せぬ事態というのはそのことですか」

「そういうことだ。察しがいいな」

「はあ……」

悠太は曖昧にうなずいたが、それと自分と何の関係があるのか見えなかった。

「ここからがいよいよ本題だが、西朱雀地蔵通り商店街で開く伊予南フェアの後、ここを伊予南市のアンテナショップにしたらどうかと俺は思いついたんだよ。そこでだ。お前、ここに並べられる伊予南市の名産・特産品とその生産者のリストを明日の朝までに作ってくれないか。俺はそいつを持って明日、商店会と話をするつもりだ。そしてゴーサインが出たら、お前は伊予南市に戻って生産者たちを口説いてくれ」

「あの……今、明日の朝までにとおっしゃいましたよね」

「そうだ。明日の朝、俺が出勤する前までだ。悪いが今晩は徹夜だな。お詫びに夕飯をおごつてやるよ。美味しい寿司屋があるんだ」

四分地は空き店舗の鍵を締め、商店街を天興大学方面へと再び歩き出した。

Kazubiro Shibuya

作家・経済ジャーナリスト・
大正大学表現学部客員教授。
1959年12月、横浜生まれ。

日経BP社で「日経ビジネス」副編集長、「日経ビジネスアソシエ」創刊編集長、「日経ビジネス」発行人などを務めた後、2014年3月末、独立。1997年に長編ミステリー『錆色（さびいろ）の警鐘』（中央公論新社）で作家デビュー。TV、ラジオでコメンテーター、MCも務める。